

2021 年度自由研究

旅で出会いたい建築 ～岐阜県白川村御母衣「旧遠山家住宅」との出会い～

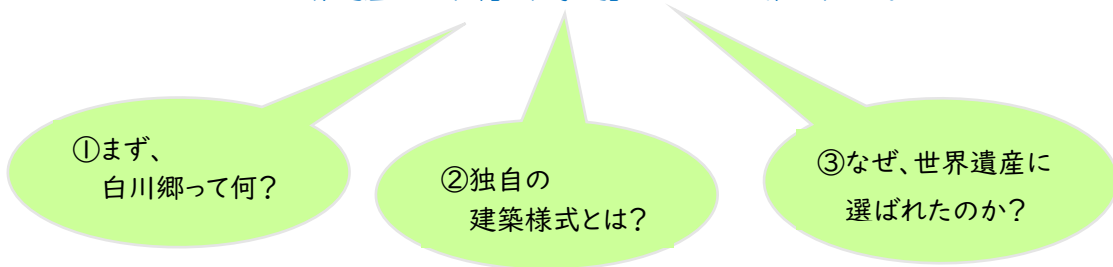
2E-11 佐伯 育子

1. 研究のきっかけ

コロナ禍で自由に旅に出かけられられない状況が続いていますが、もし、この状況で旅に出かけることができれば、「その旅先でその土地の文化や歴史に根づく建築に出会えると旅はもっと豊かになる。」と感ずるようになりました。それは、昨年度の自由研究で「理想の家」の模型を作ったことで建築をより身近に感じ、興味を持つようになったからです。そこで、以前から訪れてみたかった「世界遺産・白川郷の合掌造」について理解を深め、自由な発想で合掌造の建築模型を作りたいと思いました。

2. 「白川郷の合掌造」の建築模型を作る前に・・・

「世界遺産・白川郷」「合掌造」について理解を深める。



①まず、白川郷って何？

岐阜県大野郡白川村にある現在も人が住んでいる「合掌造の民家の集落」のこと。

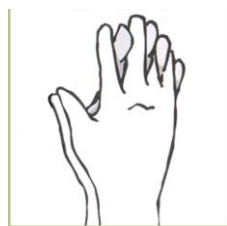
1995年に「白川郷・五箇山の合掌造り集落」として ユネスコの世界遺産（文化遺産）として登録された。合掌造の民家は「白川郷（岐阜県）」と「五箇山（富山県）」と呼ばれる地域にあり、合掌造の家々が並ぶ3つの集落（白川村荻町・平村相倉・平村菅沼）が世界遺産の対象になっている。世界遺産に登録されたことで知名度が増し、国内外から毎年多くの観光客が訪れている。



②独自の建築様式とは？

独自の建築様式＝「合掌造」

「合掌造」とは、木材を梁（はり）の上に手の平を合わせたように山形に組み合わせて建築された急勾配（45～60度）の茅葺きの切妻屋根を特徴とする住居。山深い豪雪地帯で生まれた。



「合掌造り」という名前は手をあわせる「合掌」から来ているんだね！
他にも日本には「合掌造り」の建物があるけれど、なぜここがユネスコの文化遺産に選ばれたのだろう？

③なぜ、世界遺産に選ばれたか？

(1) 白川の自然環境に合わせた造りをしている

積雪が多く雪質が重いという地域柄から、白川では「切妻合掌造」といわれる屋根の両端が本を開いて立てたように三角形になっているのが特徴の構造。屋根は茅(かや)や藁(わら)などで葺かれているものが多い。

東西に向いた屋根面が45~60度の傾斜を持つ屋根は、豪雪による雪下ろしの作業軽減や多雨地帯であることから「水はけ」をよくして、日照によって効率的に乾燥させることで屋根を葺く茅を腐らせないための工夫がある。

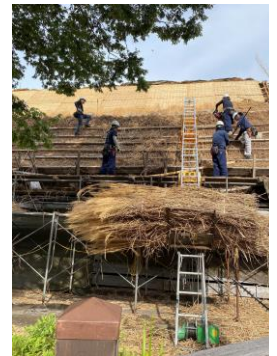
屋根裏は倉庫として使われることがあるが、合掌造の家屋では、屋根裏はだいたい3階から4階に分けられた。そこでは、両側の「妻」から光が入り、南北に風がよく通り、養蚕の蚕を飼う場所やクワの葉の貯蔵場所として積極的に活用されてきた。養蚕は江戸末期から明治・大正期(1830~1930年頃)に最盛期を迎えたと言われている。

(2) 今も「結(ゆい)」の心を大切にしている

19世紀末まで、岐阜や富山の山間に合掌造り家屋がよく見られたが、1930年の小牧ダムを皮切りにいくつもの電源開発用のダム建設が進み、多くの集落が水底に沈んだ。また1950~60年代には「古く、不便」な合掌造家屋の多くが建て替えられてしまった。

白川の人々の暮らしは急速に変わりつつあるが、残された合掌造りの家屋で今も毎日暮らしている人々がいる。1971年に保存活動が本格化し、1995年に「自然環境と完璧に適応した伝統的な人の居住の傑出した例である」として世界遺産に登録された。

合掌造りの家屋の大きな屋根を葺き替えるときには集落の人々が協力する助け合いが今でも残されている。茅葺き屋根は30~40年に一度、葺替えが必要と言われ、かつて日本中で見られた「結(ゆい)」という「共同体の助け合いの精神」を白川の人々は大切に守っている。



3. 実際の旅へ...



このコロナ禍で出かけることも難しいと思いましたが、調べているうちに「『旅で出会いたい建築』としたからには、実際に旅をして『合掌造』の建築物に出会いたい」という思いが強くなりました。3密を避けること(具体的には、車移動・食事は基本的にテイクアウトでとる、人混みは極力避けるということなど)を守り、8月上旬に家族と岐阜県に行くことにしました。



京都からは岐阜県まで車で約4時間って意外に近いんだね。
この旅でどんな出会いがあるのかな？

宿泊したホテルは今年8月2日に開業された新しいホテルで、まだ宿泊客が少なかったです。白川郷から車で1時間ほど離れた岐阜県の荘川町を拠点に3日間の「旅」がはじまりました。

1日目、荘川町に到着後は、資料集めをしたり、ホテルの方々に白川郷や飛騨高山についてのお話を伺ったりしました。

2日目に白川郷に車で向かう車中から、突然、大きな合掌造の家屋が目に入り、車を止めました。車を降りて見てみると、家屋の前には「国指定重要文化財」という看板がありました。しかし、その日は、中に誰もいなかったので入れませんでした。その後、白川郷に見学に行きました。この日は、茅葺きの葺替えをしている現場を見たり、そこでお話を聞いたりもしました。



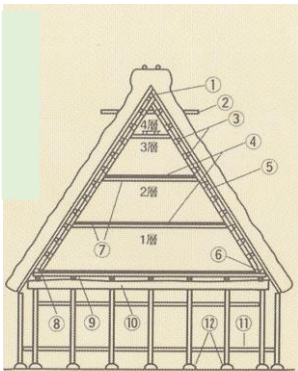
3日目の最終日、帰る前に昨日入れなかった合掌造りの「旧遠山住宅」のことが気になったので、再訪することにしました。まさに「旅で出会いたい建築」の「出会い」がそこにはありました。

4. 「国指定重要文化財 旧遠山家住宅」について



3日目の最終日、「旧遠山住宅」を再訪し、この日は中に入ることができました。旧遠山家は文政10年(1827年)頃、能登の大工によって建てられた大きな合掌造の家屋ですが、現在は「旧遠山家族族館」として、一般に公開されています。中に入ると、遠山家の親戚であり、現在、旧遠山家住宅を管理されている新谷まどかさんが出迎えてくださいました。自由研究で合掌造の家の模型を作りたくて

調べているということを伝えると、とても親切にわかりやすく合掌造の構造、それぞれの部屋の役割や遠山家の歴史について教えてくださいました。



1~3層:
養蚕スペース

1階:
居住スペース

1階部分は居住スペース、1~3層(屋根裏)は当時、主要産業だった「養蚕」のスペースとして使われ、明治の中頃まで数十名の大家族が居住していました。「養蚕」は蚕の数を増やし、エサとなる桑の葉を大量に集積するために、屋内を多層化した合掌造が生まれたとも言われています。



- 合掌造りの部材名称
- ①からすおどり
 - ②みずはり
 - ③やなか
 - ④すのこ
 - ⑤合掌
 - ⑥くさり桁
 - ⑦合掌梁
 - ⑧こまじり
 - ⑨ならし
 - ⑩梁
 - ⑪根太
 - ⑫石場

遠山家は近世白川郷の主幹産業であった焰硝(えんしょう: 火薬の原料)産業や養蚕業の発展に大きく寄与した家であり、代々、村の名主(なぬし)を務めました。今も見られる遠山家の屋根の内側にある「フサ」がその「しるし」だそうです。

1階: 居住スペース

うすなが: 作業場「ひきうす」などがありました。

だいご: 台所

おくのちようだ: 家長の寝室

へんち: 便所(トイレ)

おもや: お客の接待などに使われ、中央に「戸」がありました。

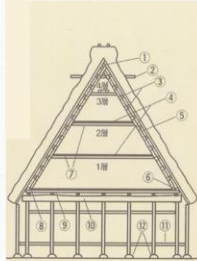
ないじん: 仏間

1～3層:養蚕スペース

⑦合掌梁(がっしょうはり)



1～3層までは「ツシ」とよばれ、主に「養蚕」の場でしたが、物置や作業場としても使われていました。



合掌造りの部材名称

- | | |
|---------|-------|
| ①からすおどり | ⑦合掌梁 |
| ②みずはり | ⑧こまじり |
| ③やなか | ⑨ならし |
| ④すのこ | ⑩梁 |
| ⑤合掌 | ⑪根太 |
| ⑥くさり桁 | ⑫石場 |



③やなか:横に組まれた木

15メートルほどのスジカいで互いに結束して約60度の急勾配の屋根をつくります。

これに15000束以上の茅を村内の男女総出で奉仕して葺かれていたそうです。



④すのこ
1層以上の床は板張りせず、篠竹を編んだ「すのこ」が並べてありました。

新谷さんの説明を聞いたり、質問したりしながら、遠山家の合掌造の家屋を見学して、一番驚いたことは、合掌造の建築には釘やカスガイなどの金属の材料は一切使わず、縄と粘りのある「ネソ(マンサクの若木)」ですべて縛り結びつけて造っていたということです。また、屋根裏の床が板張りになっていないのは、1階の炉の火の煙が上層まで上り、屋根裏の藁縄や茅に「スス」が真っ黒に付着することで、防虫と防腐に役立っている(そのため、今でも1階の炉では火が炊かれている)ことを聞き、厳しい自然の中で暮らす人々が生み出した知恵に感心しました。

ドイツの建築家であるブルーノ・タウト(1880-1938)が昭和10年(1935年)に遠山家を訪れたとき、「これらの家屋はその構造が合理的であり、論理的であるという点においては、日本全国を通じてまった独自の存在である」と称賛しました。このタウトの合掌造の評価は、「日本美の再発見」であったと言われたそうです。



旅マップを見てみよう!



荻町城跡展望台から見た白川郷



遠山家



荘川桜



御母衣湖



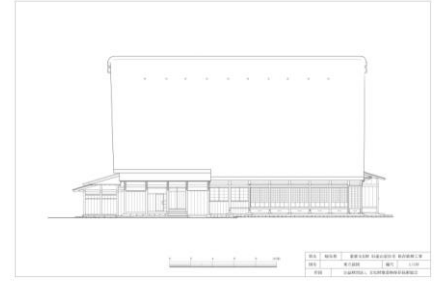
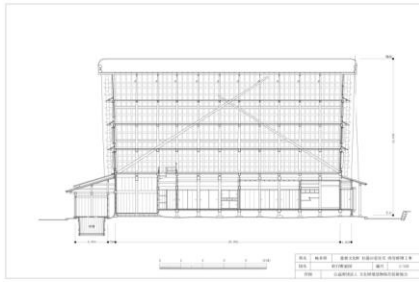
ホテル



そばの里 荘川

5. 実際に模型を作ってみる

遠山家に行ったときに資料をもらったり、たくさんの写真を撮ったりしましたが、インターネットで調べていると遠山家の住宅図面を見つけることができました。足りない図面があったので、白川村役場に電話して、教育委員会事務局・文化財係の章さんという方にメールで送ってもらいました。(下図:左から「桁行断面図」「南立面図」「東立面図」)



模型作りで大変だったこと・こだわり①

材料探し:

縄のかわりにたこ糸、天然の木のかわりに公園(川原)で木材探し、茅のかわりに藁を、屋根の「よしず」や「すのこ」は家にあった手巻き寿司で使う「ミニまきす」を使うなど、代用品を探すのに、苦労しました。



↑家の前の公園で木材を探しました。



↑「よしず」のかわりの「まきす」 ↑「茅」のかわりの「藁」



合掌造の「スス」で黒くなった様子は「顔彩」で表現しました。

住居の1階はスチレンボードで組み立てることにしました。

模型作りで大変だったこと・こだわり②

合掌造の屋根の再現:

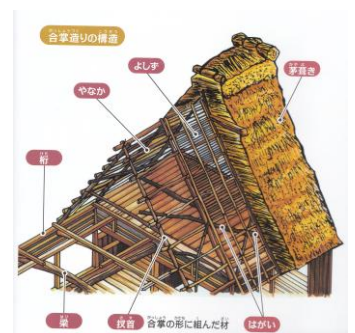
合掌造の家を作ろうとするととても大きなものになるので、合掌造の屋根造り(一部分)にこだわって作ることにしました。しかし、釘を使わずに建てられる「小屋組」を再現する



には思ったよりも難しく、縄の代わりにたこ糸を使って、木材を一つひとつ結びつけたのですが、とても時間がかかり、大変でした。結んだたこ糸を固定させるには瞬間接着剤を使いました。

また、藁を屋根に敷き詰める作業もなかなかうまくいかず、ワイヤー、あさひも、

ミシン糸、ボンド、のり、スプレーのりなどを使って仕上げました。



模型作りで大変だったこと・こだわり③

4層構造の表現:合掌造が印象的なのは、屋根の1層~3層の障子の窓と夜間のライトアップ。屋根を作った後には障子のある壁を作り、4層構造を表現したいと考えました。



6. まとめ

「その旅先でその土地の文化や歴史に根づく建築に出会えると旅はもっと豊かになる。」という「仮説」を立ててからはじめた自由研究でしたが、実際に旅したことで、白川村御母衣の「旧遠山家住宅」に出会うことができました。それは単に「合掌造の家」という建築物に出会っただけでなく、「旅で出会った建築物」を通して、旅の間、そして旅を終えた後も、多くの人々に会い、協力していただきながら、この研究に取り組めたことで、私の旅はたしかに「より豊かなもの」となりました。この研究は、「遠山家」の新谷まどかさんをはじめ、白川郷やホテルの方々、また、白川村役場や図書館の方々、またホームセンターなどのお店の方々といった周りの方々の支えがあったからこそ、実現できたと思っています。この研究を通して、白川の人々が大切にしてきた「結」の心を感じることができました。

これから、コロナが収束して、自由に国内外を旅することができれば、その旅先で数々の建築に出会い、今までよりももっと豊かな旅を続けていきたいと思っています。

7. 最後に

私が、今回、この自由研究で学んだ、白川郷での「連帯、助け合い、人のつながりの大切さ」を、この長く続くコロナ禍だからこそ、発信する必要があるのではないかと考えています。それはSDGsの11番の「住み続けられるまちづくり」という目標に通じると思います。そして、互いに支え合う人々の新しいつながりが「コロナ禍で必要な助け合い」=「結の心」ではないかということです。



参考文献

- 宮澤智士(2005)『白川郷合掌造 Q&A』 智書房
- 藤井恵介監修(2004)『日本の家 2 中部』 講談社
- 清原工(2007)『修学旅行で行ってみたい日本の世界遺産 4』 岩崎書店
- 世界遺産を学ぶ会(2020)『知っておきたい!日本の世界遺産がわかる本』 メイツ出版,
- 週刊ユネスコ世界遺産 No.86 (2002)『白川郷と五箇山の合掌造り/姫路城』 講談社
- 白川郷/白川村役場公式サイト <http://shirakawa-go.org/>
- 白川村教育委員会(2016) 重要文化財旧遠山家住宅保存活用計画
http://shirakawa-go.org/uploads/yakuba_info20210818_03.pdf
- 黒田乃生(2010)『世界遺産登録の意義 -地域への影響-』
http://www.ecpr.or.jp/pdf/ecpr26/ecpr26_1.pdf

※写真はすべてこの自由研究の間に撮影した写真を使用しました。